

徘徊は本当に 問題行動なのか

すべての徘徊行動には必ず理由があるという考えで …

グルーピングケア研究会 代表 遠藤 邦弘

グルーピングケアと徘徊…「ケアする側に何らかの問題がないのか。深刻な行動であるが極めて自然なものである」!

徘徊は本当に問題行動なのか

1 徘徊の原因

どうして徘徊は悪い行動として捉えられるのでしょうか。徘徊は認知症全体の20%に過ぎません。徘徊が多く見られる時期は、朝夕の徘徊・食事やおやつの前後・面会後の徘徊など役割事のない、自由な時間に多く見られます。徘徊の原因の背景にあるものは「認知障害」「見当識障害」「不安」「ストレス」など、その人の長年の職業習慣であったり、生活習慣であったりする場合です。しかし、このこと以外に大きな問題なのが、介護のまずさや抑圧された生活の中で起こる緊張感からくるストレス等が原因で起こる徘徊です。無目的に徘徊する場合を除いて、ほとんどは生活面や介護のまずさなどの環境面からくる原因が大きいと思われます。頭頂葉障害論が主で「ストレス解消行為」と理解することが肝要で、動き回ることによって、緊張やストレスを発散させようとする機能的対処行動と捉えることができます。

2 徘徊の種類

- ①探索型：環境の変化や瞬間的な思いつきの判断から起こる。
- ②勤勉型：長年の生活や職業習慣によって起こる。
- ③無目標型：もうろう状態や意識障害等の認知障害によって起こる。
- ④緊張型：ストレスや緊張により、集中力・注意力の欠如から起こる。
- ⑤反発型：欲求が満たされない時に起こる。

特殊な徘徊として、ピック病の徘徊を情動散歩又は情動的徘徊という人もいます。例えばアルツハイマーの方は、脳の委縮で障害がおこるため、方向感覚が悪く迷子になりやすいと言われています。ピック病の場合は、毎日決まった同じ場所やコースをたどる傾向があります。また、日常生活上でも機転が利かず「わが道を行く」「所構わず排尿」「店から物を持ってきても悪びれない」等があります。ケアワーカーは、よく観察して他の認知症と区別してケアをする必要があります。これらの徘徊を「常動的散歩」と認識する人もいます。徘徊には理由があることを忘れてはなりません。単純に徘徊をするから制止するというケア方法は「作られた徘徊」として最もしてはならないケア行為です。

3 徘徊の対応

ケアワーカーは、徘徊を「問題行動」と捉えず、徘徊の原因について細かく観察することから始めなければなりません。徘徊そのものを異常視することは、絶対に避けなければなりません。徘徊という言葉は、大樹林では「目的もなくうろうろと歩き回ること」「うろつくこと」と「葛藤からの逃避、精神病・痴呆などにより、無意識のうちに目的なく歩きまわること」とされています。ここでは、徘徊を「無目的な歩き」と考えず、理由や原因があることをしっかり理解しておかなければなりません。

ケアワーカーは、徘徊の引き金になった原因や理由の根底を知ることからスタートしましょう。徘徊の「きっかけ」「心理的動機」「欲求」「感情や情緒」を探り、欲求行動の推察・判断が大切で

す。対応の手掛かりを知ってこそ対策が見えてくるのです。徘徊の「特徴」「量」「時間」「質」「言動」等あらゆる面から行動を分析し、原因を明確にすることです。

例えば、「興奮しながら歩きまわる」「多動的に歩きまわる」「季節・時間に関係ない行動」等の徘徊ですが、原因を知る具体的方法として「活動レベル」「移動経路」「言動の内容」を記録して特徴や種類、背景を知ることが重要です。

人間は物事を判断する上で、物の大きさ・速さ・色・形状等判断の材料はいろいろあります。その人が生活してきた中で体験等を通して「感覚」で判断しています。一般人でも人間の判断は必ずしも正確ではありません。ましてや認知症の方の判断能力は大きく違って、生活に影響する場合があります。その判断が誤ると生活に適応できなくなり、生活障害として判断されます。例えば、「周囲全体の状況を見なかったり」「行動全体に余裕がなく慌てたり」「スピード感が失われ、周囲との歩調が合わなかったり」等、物事の全体の流れを考慮せずに判断することで正確な判断ができない状態になります。その自分の判断が結果として、現時点の生活に合わないことに気がつかない状態で行動しているのが、徘徊として捉えられるのです。

認知症の方の生活能力や行動能力を判断して、対応しなければなりません。実際に対応する際の要点として次の点に考慮します。

- 1) 回りの人が何を話しても自分の目標に向かって、頑固に進もうとします。邪魔になるものに対しては、これを排除しようとし、注意されると興奮し抵抗します。
- 2) 認知症を理解せず、長いこと思いを汲み取った対応をしないと不信感を持ち排他的になります。突発的な行動をし、ケアに対して抵抗するなどし非協調的になります。
- 3) 判断能力が障害されると周囲の状況を確認せずに思いのままに行動します。心理的にイライラ状態で欲求不満からの衝動的行動が発生します。
- 4) 自己満足しようと実力の伴わない行動をします。また、他人の注目を浴びようとヒステリック状態になり危険をかえりみない行動に出ます。
- 5) 危険予知能力が欠けていることが多いため、限界を超える行動をします。現状の能力や実力を混同し心理的動機の過剰反応を示します。